

# vol. 2-3 こへび新聞 号外



大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2003  
会期：2003年7月20日～9月7日  
会場：越後妻有6市町村（新潟県十日町市、川西町、津南町、中里村、松代町、松之山町）全域762・  
主催：大地の芸術祭・花の道実行委員会  
参加アーティスト：23カ国約150組  
総合ディレクター：北川フラム（アートディレクター）

こへび隊は、大地の芸術祭に積極的にかかわり、その前線で活動に取り組んでいます。  
こへび新聞では、このこへび隊の活動を発信していきます。

## 1/31・2/1 大地の芸術祭企画発表レポート

…… 松代・松之山ステージ カフェ・レストランチーム  
地元お母さんと妻有の味を提供  
…… 短編ビデオフェスティバル審査結果発表とチームの活動  
…… 「真実のリア王」アーティスト こへび隊と一緒に妻有来訪

## 3/1 サポートスタッフ全体会議

…… ボランティアという枠を超えて  
…… アート作品紹介

## こへび隊合宿

…… まつだい冬の陣～巨大蛇とロウソクの宴～  
…… 越後松之山里山学会

イベントチーム・サトヤマ始動！

こへび隊の活動カレンダー

こへび隊事務局からのお知らせ

CONTENTS

## カフェレストランチーム

### 【 主役は妻有の味 】

東京企画発表では、越後妻有の郷土料理が振舞われた。郷土料理は地元の人々とともにこへび隊松代及び松之山カフェ・レストランチームが調理した。300人分という大量の料理を作るため、こへび隊は2日前から松代町、松之山町に入って下準備を始めた。調理した越後妻有郷土料理は、出席者に大好評であった。

### 松代メニュー「棒鱈煮」「うさぎ汁」etc.

当日はお母さん方の他に数名の地元の応援も加わって、妻有の暖かい雰囲気と料理と共に提供できました。おかげで、料理についての当日アンケートには好意的な回答も多く見られましたが、今後、レストランの運営を考えていく上で課題点も数多く見受けられ、やはりまだまだ勉強が必要なようです。（松代カフェ・レストランチーム：長谷川 蘭）



・300人分目指して皮むきだ

### 松之山メニュー「じゃがいものころがし」「かぼちゃようかん」「大根煮なます」etc.

1月29日の朝、私は天気予報で大雪の松之山を目指して電車に乗った。越後湯沢発のほくほく線は、雪国の電車なのに止まることなくと噂で聞いていたが、そんなほくほく線が遅れていた。まさに、不安と期待を抱えての松之山訪問となった。

1日目は、松口集落の志賀一枝さんのお宅におじゃまして、3人のお母さん方と、「かぼちゃようかん」「じゃがいものころがし」を作った。かぼちゃの裏ごしに手間がかかり、寒天の配合に苦戦したが、だるまストーブの上に乗った大きな鍋がコトコトとまっ白な湯気を出している光景は雪国独特の情景で、私はそれをぼんやりと眺めていた。

2日目は、松口集落の集会所で8人のお母さん、役場の方、そして私の総勢10人で「大根煮なます」を作った。手際の良い元気なお母さんたちの中で私はただオロオロとするばかりだった。まっ白な大根と松之山名産の山菜、きのこが次々と細かく刻まれ調理された。お母さんたちは、手ぬぐいの頬被りと色とりどりの割烹着という格好。そこに混じって、下手な頬被りとまっ白な割烹着の私がいた。

私は、手ぬぐいを取った瞬間のお母さんたちの素直な笑顔が大好きである。大きな鍋を抱える姿、冗談を言って笑い合うお茶の時間、集会所の玄関に並ぶ長靴は、雪国の女性のたくましさを見せてくれた。私に「袖無し」という手作りの防寒着をくれて、娘だと言ってくれたやさしさが忘れられない。（松之山調理体験スペース担当：松本彩）

ち・松之山のお母さんたちと一緒に頬被り



1月31日（金）に東京・代官山ヒルサイドプラザ、2月1日（土）には地元十日町市クロスステンにて大地の芸術祭の企画発表会が開催された。

東京の企画発表には、約300人が出席し、会場は満員。まず大地の芸術祭総合ディレクターである北川フラムさんより今回の芸術祭の特色と概要について説明があった。今回は160組近いアーティストによるアート作品の他に、一般公募により世界中から選ばれた28組の映像作品による短編ビデオフェスティバルが展開する。アート作品では、アーティストと住民、協力者によるより深い協働や交流が、作品にかかわることによって実現している。また、現代社会のさまざまな問題要素に関連したイベントやプログラムが予定されており、より発信性を強めている。現在建設中の3つのステージはこの芸術祭の拠点となるだけでなく、今後は地域の活性化の拠点としても活動を展開していくことになるだろう。

この一連の企画発表のなかで、大地の芸術祭サポーターこへび隊の各メンバーも発表を行った。

短編ビデオフェスティバルでは、映像祭チームの江口奈緒さんが発表。また、妻有のお年寄りたちとつくりあげる舞台「真実のリア王」プロジェクトのナン・フーパーさんとクリスティアン・バスティアンズさんも会場でお話し、こへび隊「リア王」チームの担当の町本和加奈さんが通訳した。そして松代ステージについて、松代ステージアーカイブチーム上原一恵さん、ステージアート作品ジョセップ・M・マルティン作品担当松本勇馬さんが発表した。松之山ステージについては、平舘圭輔さんが発表した。

そして、今回の東京企画発表においての特色はなんといっても妻有の食の提供にあった。松代・松之山ステージのカフェ・レストランチームは、地域のお母さん方と計12種類のお総菜とおにぎり、うさぎ汁など妻有ならではの料理を地元にて調理し、当日に会場へ運んで、お母さん方とともに妻有の味を振る舞った。会場は大地の芸術祭に注目する人々で埋め尽くされ、妻有の味がその交流を促していた。

東京企画発表では、会の準備から運営までこへび隊が中心となって会を進行した。こへび隊事務局の水野真弓さん、松之山チームの桑原康介さんが司会進行を担当。その他にも広報活動、リリースやプレゼンテーションの作成、会場設営、サインやパネルの制作などをこへび隊が分担して準備を行った。プレゼンテーション画像の編集にも当たった松之山チーム平舘圭輔さんに話を聞いた。

「プレゼンテーションについては、時間内にプレゼンを終えるための工夫と何を優先させて伝えるのかを考えることに大変苦労しました。人に物事を伝えることは今後の自分の課題としてまだ残っています。これからは、ますますアート作品から妻有のプロジェクトまで含め自分の考えを人に正確に伝えることが重要になってくるのだと思いました。」

現在、こへび隊などの大地の芸術祭サポーターの活動も東京で、妻有でとさまざまなに繰り広げられ、会期に向かってそれはさらに展開していくだろう。このようなアーティスト、住民、サポーターという立場にとらわれない協働のなかから、大地の芸術祭はそのプログラムもさることながら、きっと新たな地域づくりのあり方を発信していくのではないだろうか。その後、こへび隊全体ミーティングなども行われ会場は熱気で溢れていた。



・食を楽しむながらの交流の様子

# 大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2003 企画発表レポート

翌日2月1日。十日町クロスステンは約500名もの住民を中心とする出席者でいっぱいだった。

その妻有会場では、地元ならではの報告発表があった。第1回から現在までに制作された作品にかかわる住民より、作品の設置から現在までのプロセス、そして作品に対する思いなどについて各市町村を代表して6組の報告発表があった。

松之山町にあるマリーナ・アブラモヴィッチさんの「夢の家」の管理人である村山林平さんは、のんびりとした口調で「お客様から、『松之山は第二のふるさとです』なんていうお手紙が来るといいなあ、と夢みております」と語り、会場を沸かせた。報告からは、作家が近所に来訪し、制作するまでの戸惑いや作家との交流、ワークショップを体験しての感想、そして、作品を訪ねて来る人々との交流や大地の芸術祭に対する期待など、どれもその作品に対する愛情を感じさせる内容だった。作品がその場所でそこに住む人々に愛され、生きていくのを感じさせた。

また、世田谷文化生活情報センターの永井多恵子さん、新潟県知事の平山征夫知事、北川フラムさんによるてい談も行われた。



・地元住民による報告発表の様子

開催まで半年を切った。この企画発表は、こへび隊メンバーにもよい機会となったようである。芸術祭にリアリティを感じ、イメージをして焦ったり、抱負を新たに確認したり。さまざまな人とかかわり、多くの人を巻き込み、活動していく中でつながって作り上げていく大地の芸術祭。その盛り上がりを感じさせる企画発表となった。

## 「リア王」チーム

### オランダ流、現代悲劇「真実のリア王」主人公はおじいちゃん！?

シェークスピアの3大悲劇の一つ「リア王」が、オランダのアーティスト、クリスティアン・バスティアンズさんとナン・フーパーさんによって現代風にアレンジされ「真実のリア王」として蘇る。この劇は、本国オランダで精神病患者を役者に上演、大評判となった。妻有では、松代町の高齢者に役者として登場してもらい、「過疎化」をテーマにこの劇を企画している。バスティアンズさんは、3月から現地に長期滞在し、お年寄りの話を聞き、コミュニケーションを取りながら物語を作り上げていく予定。去る1月、舞台照明・美術を担当するフーパーさんとともに初めて現地を訪れた。この「真実のリア王」は、MVRDVが設計を手掛けた「雪国農耕文化村センター」の野外劇場で、劇場の

こけら落としとして上演される。里山を背景に取り込んだ舞台で、オランダのアーティストと地域住民が新しい「リア王」に挑戦。

### クリスティアン・バスティアンズ、ナン・フーパー妻有訪問

冬晴れの東京から妻有に着いたふたりは雪の多さに驚いていました。ナンは「電車から見えるならかな山の形に特徴がある」と夢中で写真を撮って、「舞台の照明に山の形を取り入れられたらいい」と言っていました。クリスティアンは舞台の衣装に使うため、十日町で代表的な餅・友禅それぞれの工場を見学しましたが、十日町の織物がきれいでつくりや手法が精密なのに驚き、糸や布のサンプルを分けていただいで感激していました。彼は短期間日本に住んだことがあり、英語と日本語を混ぜて旅館や市役所の方に話しかけていました。3月から5ヶ月間の妻有滞在中で地元のお年寄りとの間にどのようなコミュニケーションが生まれるか非常に楽しみです。（リア王チーム：町本和加奈）

## 映像祭チーム

### 【 個性溢れる28作品、一次審査通過 】

大地の芸術祭会期中を通して6市町村全域で行われる短編ビデオフェスティバル。401作品の応募の中から一次審査通過作品が決定し、1月31日の企画発表で正式に審査結果発表を行った。11の国と地域から28作品が新たに大地の芸術祭に参加することになる。日本14作品、海外14作品と同数だが、海外はそのうち6作品が中国、台湾、香港、インドネシアなどアジア地域の作家によるもので、アジアにおけるビデオアートの勢いを感じさせた。その他には、フィンランド、オランダ、イギリス、イタリア、ギリシア、ニュージーランドなど、文化背景も価値観も全く異なる作品が揃った。スタイルは、アニメーションからドラマ、ドキュメンタリー、CGなど多種多様。

審査委員ホウ・ハンルウさんは、「これだけ秀作が集まったのは、このフェスティバルが世界から認知された証拠」と評価。同じくトム・フィンケルパールさんは、「編集や加工ができてしまう映像は、まさに自然の対極にあると強く感じた。越後妻有の自然に囲まれて、これらの作品がどんな効果を持つのか期待している。」と興味深いコメントを寄せた。

チームでは、現在、作品の上映場所や8月24日に行われる授賞式について検討中。1月、2月で審査員の鈴木志郎康さんと共に現地視察を行った。初めて妻有を訪れる鈴木さんや他のメンバーも、背丈より遥かに高く町を覆った雪に感嘆の声をあげた。アート作品の設置場所と合わせて、来訪者が立ち寄る食事処や温泉を巡り、人の流れや場所の個性に合わせた上映方法を検討し、企画を練っている。4月の下旬には上映場所を決定し、地域の人々と、魅力的な上映方法や演出を話し合っていく予定である。（文責：短編ビデオフェスティバルチーム：江口奈緒）



・審査員の鈴木さん（右）と初妻有